

忘れ給ふ所の御持経追って修行者に持たせ之を遣はす。

魯の哀公云はく「人好く忘るゝ者有り。移宅に乃ち其の妻を忘れたり」云云。孔子云はく「又好く忘るゝこと此より甚しき者あり。桀紂の君は乃ち其の身を忘れたり」等云云。夫桀特尊者は名を忘る。此閻浮第一の好く忘るゝ者なり。今常忍上人は持経を忘る。日本第一の好く忘るゝの仁か。大通結縁の輩は衣珠を忘れ、三千塵劫を経て貧路に脚躡し、久遠下種の人は良薬を忘れ、五百塵点を送りて三途の嶮地に顛倒せり。今の真言宗・念仏宗・禅宗・律宗等の学者等は仏陀の本意を忘失し、未来無数劫を経歴して阿鼻の火坑に沈淪せん。此より第一の好く忘るゝ者あり。所謂今の世の天台宗の学者等と持経者等との日蓮を誹謗し念仏者等を扶助する是なり。親に背きて敵に付き刀を持ちて自らを破る。此等は且く之を置く。

夫常啼菩薩は東に向かひて般若を求め、善財童子は南に向かひて華嚴を得る。雪山の小児は半偈に身を投げ、樂法梵志は一偈に皮を剥ぐ。此等は皆上聖大人なり。其の迹を検すれば地住に居し、其の本を尋ねれば等妙なるのみ。身は八熱に入りて火坑三昧を得、心は八寒に入りて清涼三昧を証し、身心共に苦無し。譬へば矢を放ちて虚空を射、石を握りて水に投ずるが如し。

今常忍貴辺は末代の愚者にして見思未断の凡夫なり。身は俗に非ず道に非ず禿居士。心は善に非ず悪に非ず羝羊のみ。然りと雖も一人の悲母堂に有り。朝に出でて主君に詣で、夕に入りて私宅に返る。嘗む所は悲母の為、存する所は孝心のみ。而るに去月下旬の比、生死の理を示さんが為に黄泉の道に趣く。此に貴辺と歎いて云はく、齡既に九旬に及ぶ。子を留めて親の去ること次第たりと雖も、情事の心を案ずるに、去りて後は来たるべからず、何れの月日をか期せん。二母国に無し、今より後誰をか拝すべき。離別忍び難きの間、舍利を頸に懸け、足に任せて大道に出で、下州より甲州に至る。其の中間往復千里に及ぶ。国々皆飢饉して山野に盜賊充滿し、宿々糧米乏少なり。我が身羸弱にして所従亡きが若く牛馬合期せず。峨々たる大山重々として、漫々たる大河多々なり。高山に登れば頭天に摔ち、幽谷に下れば足雲を踏む。鳥に非ざれば渡り難く、鹿に非ざれば越え難し。眼眩き足冷ゆ。羅什三蔵の葱嶺、役の優婆塞が大峰も只今なりと云云。

然る後深洞に尋ね入りて一菴室を見るに、法華読誦の音青天に響き、一乘談義の言山中に聞ゆ。案内を触れて室に入り、教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し、五体を地に投げ、合掌して両眼を開き、尊容を拝するに歡喜身に余り、心の苦しみ忽ちに息む。我が頭は父母の頭、我が足は父母の足、我が十指は父母の十指、我が口は父母の口なり。譬へば種子と菓子と身と影との如し。教主釈尊の成道は浄飯・摩耶の得道、吉占師子・青提女・目犍尊者は同時の成仏なり。是くの如く觀ずる時無始の業障忽ちに消え、心性の妙蓮忽ちに開き給ふか。然る後、随分に仏事を為し、事故無く還り給ふ云云。恐々謹言。

富木入道殿